

私が住み込んでいた孤児院には、地域の貧困層を対象とした格安の保育園があった。いろいろな理由できちんとした保育園に行けない子供たちを集めて月曜日から土曜日の午前中に保育サービスを提供するものだ。入学の条件は「貧困であること」だ。日本にして月額300円が学費だ。私は、単純に貧困なのだったら保育園には行かなくてもいいのではないのかと、考えていた。しかし、親たちはなんとか頑張って学費を捻出してくるのだ。なぜならそれは、小学校へ進級するためには幼稚園の卒業証書が必要なのだ。

「親が子に残してあげられるもの」とは、なんであろうか？遺産としての土地やお金。ケニアの親たちは口を揃える。「勉強させてあげること」「教育」だよ。「どうして教育なの？」と私は問う。「教育は奪われることもなければ、消えてしまうこともない。その子の血となり肉となってくれるから」と答える。そして「自分で生きていく手段を見に付け、いろいろな可能性を与えてあげたい」と続ける。かつて、イギリスの白人入植者に土地を奪われた経験をもつ彼らは、形あるものよりも形のない知恵や知識を重要視しているような感がある。

そうして子供たちは、幼稚園に毎日通ってくるが、子供たちを取り巻く環境は決して勉強に適しているとは言えない。まず朝ごはんを食べてくる子が少ない。10時おやつとしてウジというおかゆみたいなものを出すのだが、これが朝ごはんのかわりとなっている子が多い。しかも近所から通ってくる子は少なく、大半は5km以上を1時間から2時間かけて空腹のまま歩いてくるのだ。30人の子供に対して先生は一人だ。短い鉛筆10本くらいを交代で使い、ノートがないときは土の上を書いて覚えてしまう。服は肌が見えてしまうほど破けている子もいる。かばんがある子は少なく、スーパーの袋を代わりにしている。朝はみんなでお祈りをし、「今日も自分の上に朝がやってきてくれたことを感謝」するのだ。小さな手を合わせて、目をつぶってみんな祈るのだ。私はたまに目を開けてそんなみんなの祈る姿を眺めることがあった。30人の小さな子供たちは必死に目を閉じて「神様、美しい朝をありがとうございます」と真剣に祈っているのだ。



孤児院の子どもたちと



お葬式で棺を埋めたあとでの記念撮影

自分の身を嘆く子供はいない。一生懸命歩いてきて、みんなでお祈りをし、学び、遊び、毎日を生きているのだ。お手伝いをしなくていい保育園という夢のような時間を過ごしているかのようにいきいきしている。私という外国人にさえ、はじめから歩み寄り、微笑を向けてくれる。わがままで言うことを聞かない、泣いてばかりいる子供に遭遇することはついになかった。みんな「子供大人」なのだ。

生きていくことの厳しさを知る親、先生は子供に厳しい。勉強よりも前に生きていくルールを教え込むのだ。先生であろうが、近所の親であろうが、間違ったことをすると近くの人に怒られて大きくなる子供たちは、保育園でなかでも大人みたいだ。私も怒ることに抵抗があったのは最初の数日で、その後は他の先生から与えられた木の棒で、遅刻した子供やけんかした子供の手を打ったものだ。大粒の涙を流して、「POLE(=ごめんなさい)」と抱きついてくるのだ。

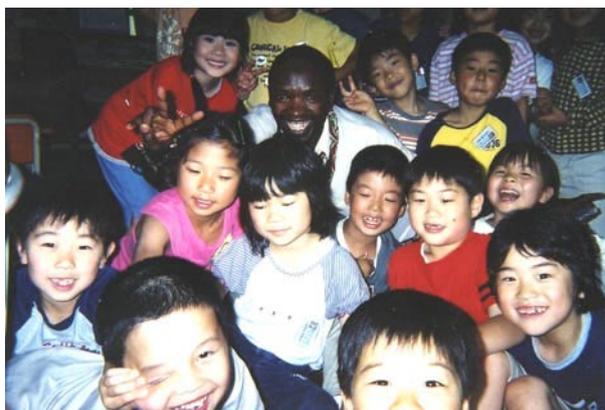
「笑わない子」がいた。フローレンスという女の子で、笑顔が印象的なケニア人の子供のなかで珍しい存在だった。なにか問題を抱えているのだろうか、

それとも保育園が退屈なのだろうか、心配しつつ接していた。たまに2人で話すことがあるたびに、「家はどうか?」「勉強は楽しい?」「友達はたくさんいるの?」など言葉をかけても、全く笑顔を見せてくれることはなかった。4,5ヶ月たった頃彼女は休みがちになった。近所のお母さんたちのうわさによると風邪ではないかと、いうことだった。そして一週間もしないうちに「フローレンスが亡くなった」というニュースを耳にした。

その後、彼女は心臓の血液が逆流するという心臓の病気であったことが分かった。感情の変化や運動でも血液が逆流してしまうということなので、感情をださないようにしていたと聞いた。家は、お父さんがおらず、お母さんはお酒を売る行商をしているが、アルコール中毒であることも聞いた。棺を作るお金は孤児院が出して、お墓に埋葬した。棺の小ささと、あまりにもあっけない死にがっかりと虚無感を感じた。

アフリカでは死が近くにあると言われることがよくあるが、私にとってはこれがはじめての死だった。その後2年あまりケニアに滞在していたが、知っている人、話したことのある人、親戚、親戚の親戚、いろんな人の訃報を耳にした。特に親しくなくても、袖擦り合う縁で出会った人々の死が身近にあることに改めてアフリカで生きていくことの厳しさを感じる。交通事故、エイズ、病気など死因はどこにでもあるかもしれないが、それに対する対策が貧困によって阻まれてしまう現実。フローレンスのお母さんは、心臓の病気と分かっているながらも打つ手はなかったのだろう。お葬式さえもしてあげられなかったのだ。お葬式の後、お母さんは私たちに「ASANTENI SANA(=ありがとうございました)」と少し笑顔を見せてくれた。

「教育」と「生きる」ということ。教育で得た知識で、生きる力を身につけること。それは、貧困から脱出することと、同じかも知れないと思う。ケニアは新大統領を迎えて、小学校の学費を無料とする



日本の子どもたちと

政策を採った。今、学校は子供たちであふれている。今まで学校に行けなかったり、途中で退学せざるを得なかった子供たちが学校に通うようになっているのだ。ニュースによると、今までずっと学校に行けなかった84歳のおじいさんも一年生として勉強しているそうだ。

ところで私はある日、近くの小学校を訪問した。目立たないよう横目で狭い教室を覗くと、きらきらとした目で何かをつかもうと必死な姿を目にした。学校で勉強することは明るい将来へと続く階段なのだろうか。そうあってほしいと思う。先生の大きな声と十人十色の子供たちの声がいつまでも私の耳に残っている。

時と場所は移って、ケニア人のだんなと共に日本の小学校を訪問したことがある。国際交流の授業にお邪魔した。子供は、どこに行っても相変わらず元気に迎えてくれる。ケニア人の黒い皮膚と髪が珍しいようで、いろんなところを触られているのを横目で見ながら思った。ケニアの子供たちもいつか日本の現代の子供たちのように生活や家の心配を小さな体ですることなく、自分の夢を叶えられる可能性のある世の中になればいいなと、考えていた。そして、あまりにも体や髪を子供たちが触るので先生が子供たちに一喝した。「失礼だからやめなさい。」

彼は言った。「失礼じゃないですよ。どんどん触って下さい。どうせ同じですから」。